

観能の夕べ

(石川県立能楽堂)

平成二十六年八月十三日(土曜日) 午後六時三十分開演

演目解説 (梶山女学園大学文化情報学部教授 飯塚恵理人)

狂言 佐渡狐(さどぎつね)

都の領主のもとへ年貢を納めに上る越後と佐渡の百姓が二人。道すがら、佐渡に狐がいるかいないか口論になり、腰の刀を賭けて御館の奏者に頼みます。狐はいると言いつ張りながら、狐を知らない佐渡の百姓は、前もって奏者に袖の下を贈り、狐の特徴を教わっておいて、越後の百姓の問いにどうにか答え、奏者に勝たせてもらいます。しかし、狐の鳴き声を問われて窮し、「月星日と鳴く」(これは鶯の鳴き声)の言い逃れは通じません。

能 小鍛冶(こかじ) 白頭(しろがしら)

一条院の臣下橘道成(たちばなのみちなり)が出て三条にある小鍛冶宗近(こかじむねちか)の家(ウキ)に急ぎます。今夜、帝の霊夢により宗近に剣を打たす宣旨が下されたからです。宗近には名誉の勅命ですが、力量すぐれた相槌打ちを持たないのを案じながら、氏神稻荷明神の神力にすがって期待に応えようとしています。祈誓する宗近の前に早くも宣旨を知った不思議な童子(前シテ)が現れ、漢王高祖・隋の煬帝・唐臣鍾馗の剣の威徳、日本武の草薙の剣の靈験を詳しく語ります。それらに劣らぬ名剣を打てと励ました童子は、助力を約束して稻荷山に姿をくらませます(中入)。宗近が注連を張った壇を調べ、諸神に祈るうちに童男姿の明神の靈狐(後シテ)が現れ鍛冶壇に上がって、宗近に従って相槌を打ちます。その響きは天地に聞こえ、やがて打ち終わって、表には小鍛冶宗近、裏には小狐と銘を刻みます。この剣による泰平を予祝し勅使に捧げた明神は、再び叢雲に飛び乗って稻荷山に帰ります。

(金沢大学人間社会研究域教授 西村 聡)

装束附

前シテ(童子) 黒頭をつけ、童子の面をかける。

後シテ(稻荷明神) 白頭をつけ、狐台をいただき、泥小飛出の面をかける。